

# 佐渡米通信

# こめる

2022年 7 月号

発行日:2022年7月

編集人:佐渡農業協同組合 営農振興部販売企画課 駒形・渡辺(清)  
jasadoeinoubu20@dune.ocn.ne.jp

## 中干し指導会

佐渡米未来プロジェクト「品質向上90」の中干し指導会が島内約70箇所のほ場を対象に行われました。「品質向上90」とは1等米比率90%以上を目標として掲げていることからこの名称にしています。

「中干し」とは、過剰生育防止のため田植え後約30日を目安に田んぼの水を抜くことです。生産者は中干しに向けて田んぼの中での生育ムラが起きないように、水が限なく行き渡っているかなど日々の細やかな水管理に励んでいました。指導会では営農指導員と生育具合を目合わせし、中干しのタイミングを確認しました。



指導会の様子

指導会の様子を動画配信しています!!



## 環境にやさしい佐渡米づくり ～プラスチック被覆肥料殻流出削減～

近年、国内外で海洋ゴミをはじめとしたプラスチック問題が注目され、農業分野では被覆肥料(プラスチック等の被覆でコーティングした肥料)の水田外流出についての対策が求められています。JA佐渡では、「プラスチック被膜を使用していない肥料による栽培試験」と「肥料殻の水田外流出防止ネットの設置」の2点の取り組みを進めています。

被覆殻が多く水面に浮かんでくる田植え前に、JA佐渡管内各支所試験ほ場に防止ネットを設置しました。このネットで殻を回収するとともに「田面の高低差をなくす」「水漏れを抑え不用意に排出しないための畦畔管理徹底」や「浅水代掻き」と組み合わせて環境問題に取り組んでいきます。



プラスチック被膜を使用していない肥料の栽培試験の様子



肥料殻の水田外流出防止ネットの設置の様子

## 佐渡の米農家さんにインタビュー!!

佐渡の北部に位置する相川地域の齊藤利典さん(57歳)にインタビューをしてきました。相川地域高千地区は、佐渡の中でも手つかずの自然が多く残っており、取材日には自生している岩ユリやカンゾウなどを道中に見ることが出来ました。

齊藤さんは関東地方で仕事をしていましたが、ご両親を見るために7年前にUターンされました。現在は急斜面に広がる2町歩で5割減減コシヒカリ(農業や化学合成肥料を佐渡地域慣行栽培基準比より5割以上減らした米づくり)を作られています。田んぼから見下ろすと海を望め、背後には大佐渡の山脈がそびえる景色は美しく、ご両親がこの場所でこの景色を見ながら毎年お米づくりをし、今それを引き継いでいることが感慨深いとお話されていました。

齊藤さんは「この地域は昼夜の寒暖差が大きくドンデン山からの冷たい水が通っているため、美味しいお米が育まれる条件が揃っているよ」と教えてくれました。斜面での作業は手間がかかり大変だが、美味しいお米を作りたいという一心で頑張っていると語られていました。



自生していたカンゾウ



田植え後の水管理をする齊藤さん



## 田んぼアート田植えイベント

色の異なる稲で絵柄を描く「田んぼアート」の田植えが、佐渡市内の水田で行われました。市内の小中学生や生産者ら約120人が苗を植えていきました。今年のデザインは、佐渡市立行谷小学校の児童の案が採用されました。佐渡ならではのトキやサダガエル、ネオニコチノイドフリーの象徴でもあるアカトンボが描かれています。田んぼアートは7月下旬から見頃を迎え、8月半ばまで楽しめる見込みです。



イベントフィナーレの様子

JA佐渡の公式 Facebook「佐渡のたんぼにつき」で佐渡の情報が見られます。  
<https://www.facebook.com/jasadotanbo>

